

「水は、あと六億年で無くなりそうな勢いで、地球に取りこまれている。」
水が無くなるだなんて信じられない。六億年先と聴いて、私は驚きと焦りで居ても立ってもいられない気持ちになった。あと六億年。これは地球にとって、長いようで実は短い期間なのかもしれない。もしも水が無くなってしまったら、私たち人間はどのように生きていけば良いのだろうか？うしたら、水の無い世界を迎えずに済むのだろうか？

二〇一八年九月六日、胆振東部地震が起きた。最大震度は七を記録し、がけ崩れや土石流で死傷者が出るなど、北海道全域に甚大な被害をもたらした。

地震が起きた朝、顔を洗おうと思ったら、お湯が出てこない。出てくるのは、冷たい水。地震が大規模停電「ブラックアウト」を引き起こしていたからだ。

洗濯機が使えない。母と洗濯物を手洗した。水はどんどん冷たくなって、手がジンジンした。けれど「もしも水が使えなくなったら：」と思うと、その『水の冷たさ』に有り難みを感じた。普段は当たり前に使ってきた『水』が、その日は魔法の液体のように感じられた。

祖母が昔の話を聴かせてくれた。私の祖母は小さい頃、地下水をポンプで汲み上げて水瓶に運んでいたという。冬は寒いうえに足元が凍っていて、それは大変だったそうだ。

「水道が整備されて、蛇口から水が溢れ出てきた瞬間、ワー！と歓声が上がったよ。」

水が蛇口から出てくるのが当たり前現在の生きている私たちからすると「労力と引き換えにしないと水が手に入らないだなんて、過酷だ：。」と思ってしまうが、当時の人からすれば「水が欲しいなら、水を汲みにいくのが当たり前」だっただろうし、もつと昔には川の水などをろ過して売り歩く『水売り』という商人が居たそうだ。

地球が四六億年も前に誕生し、それを追うようにして水は生まれてきたのだと言う。最初は何もなくてまっさらだった地球の岩石から、水が湧き出てきたのだと考えたら、とても神秘的に感じられる。

水は色々な時代と景色と、そこに生きる人を見てきたのかもしれない。

私たちの生活において、水を使わない日は一度たりともない。だからこそ「もしも水が無い日が来てしまったら：」と考えると、恐ろしくなってしまう。皆さんは、水を必要以上に使い過ぎたりはしていないだろうか。例えば、髪を洗う時。少しの気の緩みで数十分シャワーを出しっぱなしにするだけで、あつという間に数百リットル消費してしまうらしい。しかも、シャンプーの一回の使用量を綺麗な水に戻す処理において、お風呂の浴槽二杯分の水が必要になるという。この事実に、意外と自分で気付けないところもまた、恐ろしい。

蛇口を開けば水が永遠に出てくるように感じるが、水は限りある資源だ。あと六億年も経たないうちに、本当に水が無くなってしまふかもしれない。けれど、それは一人ひとりの心がけ次第で、変えることが出来るはず！と私は思っている。人間が汚水を出さずに生活することは難しいけれど、ゴミ拾いなら出来る！と思えば、私は海や川を清掃するボランティア団体に入って活動している。

ほんの少しの、小さな努力でも、あと七億年：八億年：とリミットを延ばしていけたら地球を救えるのではないか。

これらは、決して簡単な事ではないけれど、同じ地球に住む仲間と共に『限りある水』を守っていききたい。